

# 上級日本語クラスにおけるピア・レスポンスの試み (実践報告)

廣田 周子

## 1. はじめに

ピア・レスポンス (peer response) とは、「作文のプロセスの中で学習者同士のグループ (ペア、または小グループ) がお互いの作文について「書き手」と「読み手」の立場を交替しながら作文を検討し合う活動である」(池田 2002)。その効果としては、四技能の統合的な活動が行えることや学習者同士のインターアクションによってコミュニケーションスキルが身につけられることなどが挙げられている。

現在、ピア・レスポンスに関する論文がいくつか発表されているが、そのほとんどが大学生や研究生を対象としたもので、「作文コース」などの中でピア・レスポンスを行ったものが多い。本稿は、大学などへの進学者を対象とする日本語学校においてピア・レスポンスを行った記録とその問題点の報告である。

## 2. 実践報告

### 2.1 対象学習者と実施時期

今回ピア・レスポンスを行ったのは、高等専門教育機関への進学を目的として日本語を学ぶ留学生で、週5日、一日5コマ(1コマは50分)の日本語の授業を受けている学習者である。国籍は中国、台湾をはじめ、韓国、シンガポール、アメリカ、アルゼンチン、インド、ドイツ、香港などで、1クラスの人数は約14名である。授業によってクラスの編成が変わるといことはほとんどなく、毎日朝から午後まで同じメンバーで授業を受けている。

ピア・レスポンスを行った時期は、入学後半年が過ぎたところで、筆者の勤務校で「上級」と呼ばれるレベルに入ったばかりの時であった。具体的には主教材『テーマ別上級で学ぶ日本語』(研究社)の第1課学習時である。

### 2.2 作文授業の位置づけ

筆者の勤務校では定期的な作文の時間は設けてお

らず、主教材の各課で扱うテーマに合わせた作文をその課の終了時にまとめとして書く場合が多い。今回題材とした作文も主教材第1課のテーマ「ものを見方を変えてみる」に関連した意見文である。課の流れと作文の位置づけをまとめると以下のようになる。

#### 第1課 テーマ「ものを見方を変えてみる」

1~11 コマ	教科書(文法、読解など)
12~14 コマ	読解『五体不満足』(抜粋)
15~16 コマ	障害者に関するビデオ視聴
17 コマ	新聞読解
18~	作文(ピア・レスポンス)

### 2.3 ピア・レスポンスの流れ

今回はピア・レスポンスを初めて授業に取り入れたため、まずピア・レスポンスに関する「導入」の授業を行い、それからピア活動に入っていった。ピア・レスポンスの導入から作文完成まで、全4コマを使用した。

#### 2.3.1 導入(1コマ)

導入の主な内容は、ピア・レスポンスの目的を学習者に伝えること、ピア活動の練習を行うこと、意見交換の際の注意点や従来の作文の授業との相違点を確認することである。導入の初めに学習者に質問してみたところ、これまでにピア・レスポンスをしたことがあるという学習者はアメリカ出身の1名のみであった。

ピア・レスポンスの目的は「クラスメートと作文を読み合って意見を交換し、それによってお互いの作文を充実させること」と説明した。また同時に、「上級レベルでは自分の意見を書くことを求められる。意見の内容もさることながら、それを読み手に伝わるように書くことも重要なポイントである」と伝えた。

ピア活動の練習には卒業生の作文を用い、読む際のポイントを挙げたシート(資料1)を配布して実際の活動と同じ手順で行った。卒業生の作文は、中級学習時に書かれたもので、今回の学習者自身も中級で同じテーマの作文を書いている。自分が書いたことがある作文ならば自分の作文との比較もできるのではないかと思い、それを用いてみた。しかし、授業時に学習者を観察していると、まず初めにチェックを入れたのが誤字や文法ミスなどで、配布したシートがうまく機能していなかったため、チェックすべき点は文法や誤字ではなく内容であるということをごここで再確認した。

意見交換の際の注意点に関しては、ビデオを作成し学習者に示した。ビデオでは2つの場面を提示した。ひとつは悪い点を先に述べて、後からほめるというもの、もうひとつはよい点を先に述べて、後から改善すべき点を述べるというものである。また、言い方も前者は直接的に、後者は婉曲表現を交えるなどの工夫をした。これは学習者にとっては教師が口頭でいろいろ説明するよりもわかりやすく、ポイントがつかみやすかったようであった。

導入の時間の最後に従来の作文の授業との相違点を説明した。相違点というのは、学習者同士でお互いの作文を読み合う前に教師の添削はない、ということである。これまで教師の添削がまったく入らないものを学習者同士で読み合うという経験がなかったため、学習者によってはその点を懸念するのではないかと思い、説明を行った。もし、教師の添削が入らないものをクラスメートに読まれるのが嫌だという学習者がいれば、ピア活動ではなく自己添削でもかまわないと伝えたところ、ドイツ出身の学習者1名が自己添削を希望した。

### 2.3.2 作文のテーマ、指示(1コマ)

今回の作文は意見文で、テーマは「障害者が普通学級で学ぶこと」である。学習者にはこれまで授業で読んだ文章やビデオ、また自身の経験からこのテーマについて賛成か反対かを400字以上800字以内で書くことが求められている。時間は50分であるが書ききれなければ自宅に持ち帰って翌日提出することも許可した。

### 2.3.3 グループわけ(時間外)

学習者が提出してきた作文に目を通し、作文の内容や国籍、学習者の日本語力などを考慮しながらグループわけを行った。1グループ3名としたが、人

数の関係でペアになったグループもあった。

### 2.3.4 話し合い、リライト(2コマ)

あらかじめ教師が決めておいたグループにわかれ、作文を読み合った。導入コマでの練習と同様に読み取りのポイントを示したプリントを配布し、作文を読んだ後、各グループで話し合いを行うように指示した。また、話し合いが終わったグループから作文のリライトをすることとした。

ここで観察されたことは、お互いの作文を読み合うのに非常に時間がかかるということである。3名のグループの場合、2名分の作文を指示プリントのポイントについて考えながら読むことになり、それは学習者にとって大きな負担となっている様子であった。すべて読み終わって話し合いに入るまでに50分近く要したグループもあった。

また話し合いに関しても、うまく進行できないグループは、一人の作文についてばかり話してしまい全員に十分なフィードバックをすることができないという結果になってしまっていた。

他にも指示シートを配っているにもかかわらず、そのポイントを読み取ることができず、意見を求められると「すばらしいです」と言って終わってしまう学習者もいた。

ただ、クラスメートの作文を読むという点に関しては学習者自身も非常に有意義なことであると感じている様子であった。

## 2.4 考察

### 2.4.1 ピア活動時の問題点

ピア・レスポンスは「四技能の統合的な活動が行える」ものである。当然のことながら、それを行うためにはそれに必要な技能をすでに身につけていなければならない。今回の実践において明らかになったことは、「作文の内容をポイントにそって的確に読み取る」「全員に平等にフィードバックが与えられるように話し合いをうまく進める」といった技能がピア・レスポンスにおいては重要であるということである。今回ピア・レスポンスを行ったクラスの中にはその技能が不十分であると思われる学習者も見受けられた。ただし今回の作文はテーマが重く、意見の読み取りが比較的難しかったとも考えられるので、ピア・レスポンスに慣れるまではもう少し軽いテーマを選ぶ、あるいは学習者の実力に見合ったテーマを選ぶということも重要なポイントであろう。

### 2.4.2 ピア活動前とピア活動後の作文の比較

学習者によって作文の変化はさまざまであったが、作文の量という観点からすれば概ね増加が見られた。また、段落を入れ替えて文章の流れをわかりやすくしたり表現を工夫したりするなどの変化も見られた。しかし中には、最後の一文を書き直ただけでそれ以外は同じといったものもあった。逆に、表現や構成ではなく、内容自体をすっかり変えてしまった学習者もいた。

#### 2.4.3 作文」の授業の位置づけに関する問題

筆者の勤務校では先にも述べたように、定期的な作文の時間があるわけではない。主教材を用いた文法や読解、聴解、さらに日本語能力試験のための授業があり、今回はその中に数コマのピア活動が組み込まれた形になっていた。他の授業との兼ね合いもあり、作文を書いてからピア活動までの間に1週間あいてしまい、他の授業を受けているうちにピア活動の目的や意図が薄れてしまったということもあったのではないと思われる。そのため、今後このような活動を行う際には活動全体を普段の授業から切り離して、うまく学習者を誘導することも考えなければならない。

#### 2.4.4 クラス形態に関する問題

冒頭で述べたように今回対象としたクラスは1日5時間、週5日、毎日同じ教室で一緒に日本語を学習している。毎日顔を合わせる友人に、率直な意

見を述べるということにも難しい面があったかもしれない。先行研究では大学生や研究生などを対象にしており、顔を合わせる機会もそれほど頻繁ではないだろう。よってこのような点は問題にならないと思われるが、筆者の勤務校のような日本語学校でピア・レスポンスを行う際には、クラス内での人間関係等にも考慮し、学習者同士が意見を言いやすくする工夫も必要であろう。

#### 参考文献

- 池田玲子・影山陽子(2000)「専門のための日本語作文授業の試み」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第53巻, 215-226.
- 広瀬和佳子(2000)「母語によるピア・レスポンス(peer response)が推敲作文におよぼす効果—韓国人中級学習者を対象とした3ヶ月間の授業活動をとおして—」『言語文化と日本語教育』第19号 お茶の水女子大学日本語文化学会 24-37.
- 影山陽子(2001)「上級学習者による推敲活動の実態—ピア・レスポンスと教師フィードバック—」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第54巻, 107-119
- 池田玲子(2003)「日本語作文学習におけるピア・レスポンスの実践—作文教師の役割—」『日本語教育実践を再考する—教室活動における協同性をデザインする—』AJALT 第19回日本語教師のための公開研修講座資料

ひろた ちかこ／文化外国語専門学校  
c-hirota@bunka.ac.jp

#### 稿末資料1

##### 指示プリント

☆先輩の作文を読んで、以下の点について考えてください。

1. おもしろいところ、いいと思うところはどこですか。
2. 自分が書いた作文と似ているところはどこですか。
3. 自分が書いた作文と違うところはどこですか。
4. わからないところはどこですか。
5. もっと説明したほうがいいと思うところはどこですか。
6. 直したほうがいいところはどこですか。